

霧島山（新燃岳）の火山活動解説資料

福岡管区气象台
火山監視・情報センター
鹿児島地方气象台

＜火口周辺警報（噴火警戒レベル 3、入山規制）が継続＞

本日（9日）午前、航空自衛隊の協力を得て実施した上空からの調査では、前回（11月15日）と比較して火口内に蓄積された直径 600m 程度の溶岩の大きさや形状及び周辺の噴気の状態には特段の変化は認められませんでした。主に溶岩の北側及び東側から白色の噴煙が上がっており、また西側斜面の割れ目からも時折白色の噴煙が上がっていました。

【防災上の警戒事項等】

新燃岳火口から概ね 3 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要です。

風下側では降灰及び遠方でも風に流されて降る小さな噴石（火山れき）に注意が必要です。これまでの噴火では、風に流されて直径 4 cm 程度の小さな噴石（火山れき）が新燃岳火口から 10km を超えて降りました。また、爆発的噴火に伴う大きな空振に注意が必要です。噴火警報等及び霧島山上空の風情報に注意してください。

降雨時には泥流や土石流に警戒が必要です。降雨に関する情報に注意してください。

○活動概況

・上空からの調査（図 1、図 2）

本日（9日）午前、航空自衛隊航空救難団芦屋救難隊の協力を得て実施した上空からの調査では、前回（11月15日）と比較して火口内に蓄積された直径 600m 程度の溶岩の大きさや形状及び周辺の噴気の状態には特段の変化は認められませんでした。主に溶岩の北側及び東側から白色の噴煙が火口縁上 50m 程度上がっていました。前回の調査に比べて噴煙がやや多く見えるのは、火山活動の活発化によるものではなく、気象条件によるものと考えられます。また、2008 年 8 月の噴火時に形成された西側斜面の割れ目から時折白色の噴煙が数 m 上がっていました。

赤外熱映像装置¹⁾による観測では、前回の調査と比較して地表面温度分布に大きな変化はなく、火口内に蓄積された溶岩の縁辺部が比較的高温でした。また、西側斜面の割れ目の一部にも、前回の調査と同様にやや温度の高い部分が認められました。

1) 赤外熱映像装置は物体が放射する赤外線を感知して温度分布を測定する測器です。熱源から離れた場所から測定することができる利点がありますが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合があります。



図1 霧島山（新燃岳） 火口内の状況

- ・前回（11月15日）と比較して火口内に蓄積された直径600m程度の溶岩の大きさや形状及び周辺の噴気の状態には特段の変化は認められませんでした。
- ・主に溶岩の北側（赤丸）及び東側（白丸）から白色の噴煙が上がっていました。前回の調査に比べて噴煙がやや多く見えるのは、火山活動の活発化によるものではなく、気象条件によるものと考えられます。また、2008年8月の噴火時に形成された西側斜面の割れ目（黄丸）から時折白色の噴煙が数m上がっていました。

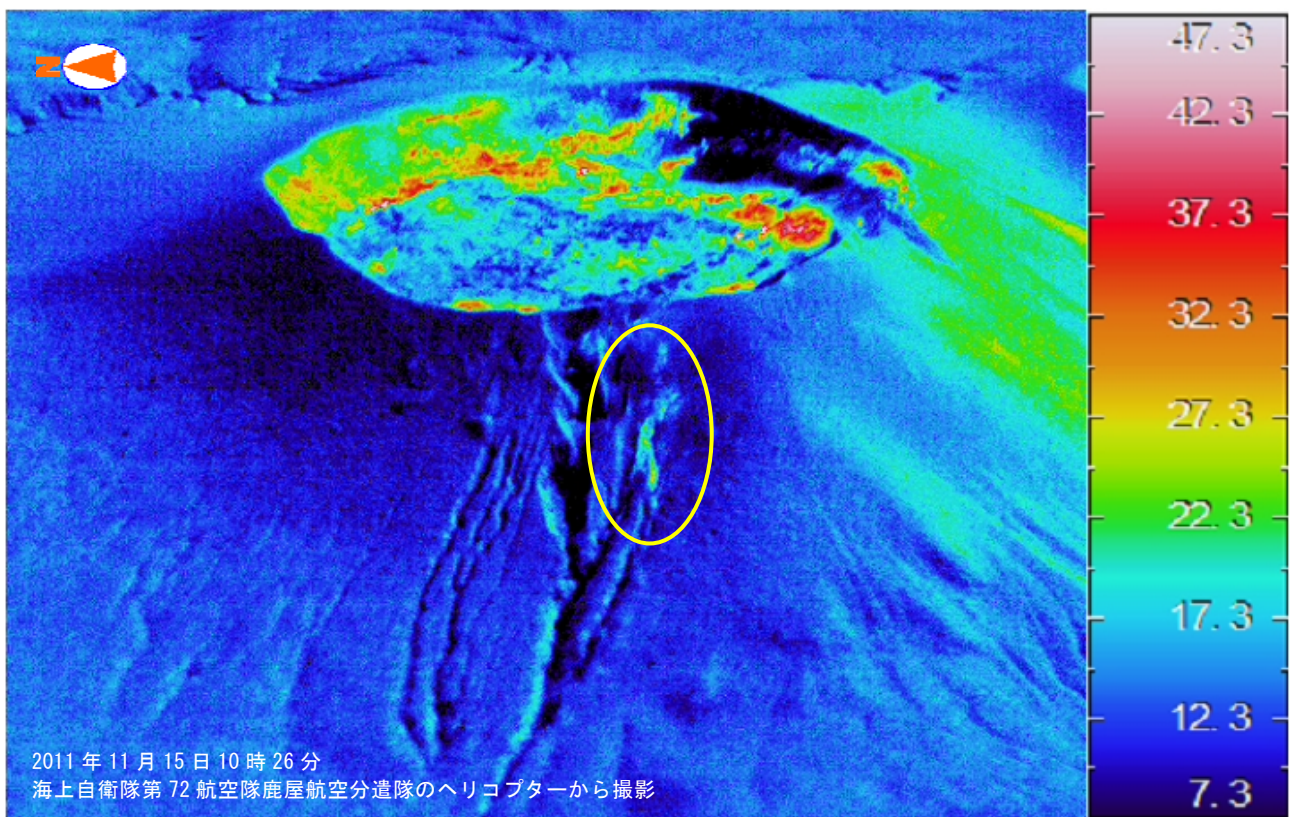
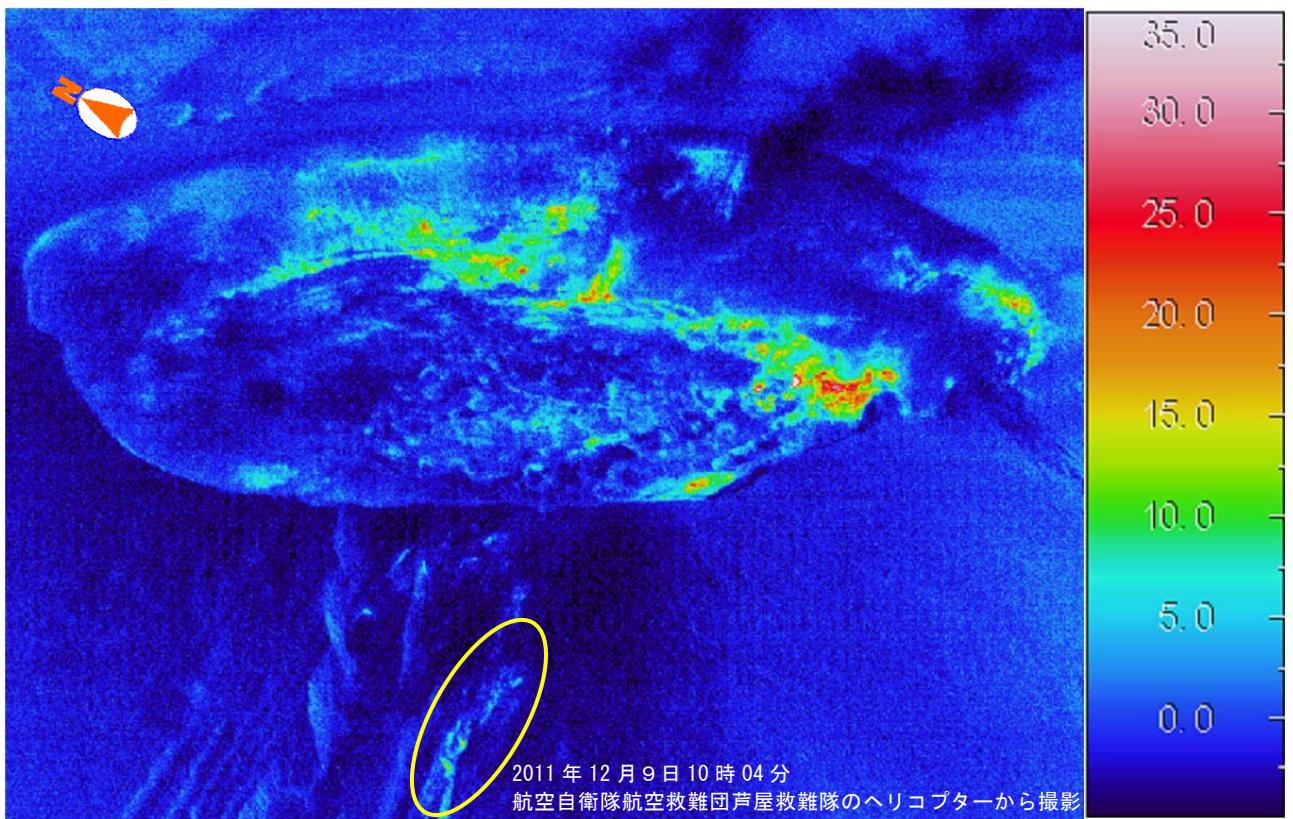


図 2 霧島山（新燃岳） 赤外熱映像装置による火口付近の地表面温度分布

前回（11月15日）と比較して地表面温度分布に大きな変化はなく、火口内に蓄積された溶岩の縁辺部が比較的高温でした。また、2008年8月の噴火時に形成された西側斜面の割れ目（黄丸）の一部にも、前回の調査と同様にやや温度の高い部分が認められました。